Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語指示詞の歴史的変化について
Author(s)	藤本, 真理子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57896
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【31】

氏　　名	藤　本　真理子（ふじもと　まりこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３４８５　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	日本語指示詞の歴史的変化について
論文審査委員	（主査） 教　授　金水　　敏 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　准教授　岡島　昭浩

論文内容の要旨

本論文は、主として平安時代を中心に、「これ・それ・かれ・あれ」等のいわゆる指示詞の意味・用法・機能の体系とその歴史的変化を論じたものである。ことに、現代日本語のソ系列が持つとされる、聞き手領域指示の機能の確立過程に力点が注がれている。

本体の構成は以下の通りである。「目次」「図版目次」「凡例」「序章」に続く第Ⅰ部「指示詞における聞き手の領域」は、「第１章　聞き手配慮と指示詞の意味・用法」「第２章　ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」「第３章　「古代語のカ（ア）系列指示詞」再考」からなる。まず第１章は、「１　研究史概観」「２　指示詞の時代区分」「３　中古文献資料の扱い―会話文と地の文―」「４　指示詞の用法」「５　上代語の指示体系について」を含む。第２章は、「２　聞き手領域の指示」「３　聞き手領域指示の検討」「４　聞き手領域指示の形成」「５　聞き手領域の成立過程」等を含む。第３章は、「２　古代語システムの予測」「３　いわゆる聞き手領域指示のカ（ア）系列」「４　古代語のカ（ア）系列指示詞と対話の場」「５　古代語のカ（ア）系列の指示の声質」「６　ソ系列の位置づけ」等を含む。第Ⅱ部「形

態から見た指示詞の歴史的変化」は、「第４章　－ナタ形指示詞の歴史的変化」「第５章－レ形指示詞の歴史的考察」からなる。第４章は、「２　先行研究の整理」「３　－ナタ形の働き」「４　－ナタ形指示詞の表す方向」「５　空間から時間へ」等を含む。第５章は、「２　－レ形の指示対象のカテゴリー」「３　先行研究の問題点」「４　－レ形指示詞と－コ形指示詞の比較」「５　－レ形指示詞における意味制約」「６　意味的範疇の変化」等を含む。第Ⅲ部「現実と非現実」は、「第６章　中古語のカ（ア）系列とソ系列」「第７章　仮想現実の設定と素系列」からなる。第６章は、「２　古代語の観念指示用法」「３　指示対象の性質」「４　中古における間接的知識の指示」等を含む。第７章は、「２　ソ系列による指示」「３　ソ系列指示詞の歴史的変化」「４　歴史的変化の背景と要因」等を含む。最後にに「結語」「調査資料」「主要参考文献」「初出一覧」を置く。A4 判 126 頁、400 字詰め換算で約 470 枚に相当する。

第１章「聞き手配慮と指示詞の意味・用法」では、ソ系列の聞き手領域指示に関わる研究史を概観し、その問題点を整理し、また本論文における用語の定義を行っている。第２章「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」では、聞き手領域指示形成の初期段階で場所指示用法が大きな役割を果たしたことを明らかにした。第３章では、現代語と異なって聞き手領域指示を行っているように見えるカ（ア）系列指示詞の用法を吟味し、カ（ア）系列が単に“コ系列でない”という特徴を持つに過ぎないことを主張する。第４章「－ナタ形指示詞の空間・時間における方向性」では、－ナタ形指示詞が場所ではなく方向を表すことを確認した上で、時間指示に転用された場合の「こなた」と「あなた」の差異について論じている。第５章「－レ形指示詞の歴史的考察」では、現代語と異なって－レ形指示詞が〈尊敬〉（される人物）〈場所〉〈時間〉を指示できることを確認し、準体表現との類似性について指摘している。第６章「中古語のカ（ア）系列とソ系列」では、遠称指示詞が観念指示用法を発揮する際の談話論的制約に着目し、現代語と中古語の違いが聞き手の知識を配慮する仕方に求められる可能性を指摘している。第７章「仮想現実の設定とソ系列」では、指示詞体系の変化を全体的に見た場合、聞き手への配慮の明示化という点が大きく関わっていることを論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文では、指示詞の直示的用法（deictic use）の体系的変化を中心に扱っている。直示用法は、発話現場における話し手、聞き手、指示対象の関係性や文脈、発話意図など微妙な要因が複雑に絡まって実現するのであり、過去の文献に遡ってその関係性を復元することは本質的な困難を伴っている。申請者は、この点を、多量の資料の徹底的な読解によって克服しようとしている。2000 件に迫る用例について詳細な解釈を施した上で、理論的な観点から的確に分類・整理し、結論を導き出す過程は決して容易ではないが、申請者はこの作業を乗り越えて一定の結論に到達することができている。ことに、中古のテキストにおいて話法が確立せず、地の文と会話文の境界が必ずしも分明でないことにまで配慮して分析を行った論文はこれまでに例を見ず、本論文の信頼性の高さが伺われる。このような、緻密な分析を積み重ねた結果、ソ系列の聞き手領域指示の初期形態が場所指示を足がかりとしている点を実証したことは本論文の最大の功績であり、この点を踏まえてこそ、聞き手配慮の明示化という大きな方向性の提示も生きてきている。

とはいえ、人称代名詞用法、特に「そこ」のそれと、場所指示「そこ」との関連性の追求が不十分に感じられること、遠称指示詞の聞き手領域指示的な用法がどのように撤退していったかという点が明らかにされていないこと、指示方略の仮説に基づく分析が必ずしも徹底されていないことなど、問題点も小さくない。しかし、本論文のもつポテンシャルは、近い将来に申請者によってこれらの問題が克服されることも十分可能であると感じさせるのである。

なお、2010 年 2 月 17 日に本論文の公開口頭試問を行った。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。